

編集後記

ここに東アジア世界史研究センターの『年報』第5号をお届けする。昨年度の中間審査において高い評価を受けることができ、無事にこの研究プロジェクトを継続できたことを、ご協力いただいた研究者、ならびに大学関係者、さらには公開講座・シンポジウムなどにご参加いただいた皆様に、この場をお借りして感謝の意を捧げたい。

オープン・リサーチ・センター整備事業として、私たちのプロジェクト「古代東アジア世界史と留学生」が採択されて4年目が終わろうとしている。来年度がいよいよプロジェクトとしては最終年度を迎えることになる。本センターでは、プロジェクト開始当初から、日本から唐への留学生を基点として、さらにそれを東アジア、つまり朝鮮半島・日本列島などの地域に存在したであろう留学生に対象を広げ、その留学生について、それぞれの地域の国家が、それぞれの社会の如何なる人物を派遣したのか、その目的は何で、実際に各地域にもたらされたものは何であったか、その交流によってそれぞれの社会はどう変化したのか、などの諸点を具体的に見つめることで、東アジア世界史を新たに構造化できないだろうかとの問題意識をもっていった。それは第1回シンポジウムの討論において展開された、東アジア世界史の有効性の有無、あるいはその有効性において留学生の果たした役割は如何なるものであったのか、といった論点、ならびに一昨年度の同第2回での、唐を中心として各国に放射線状に伸びる線の上での往復運動（冊封体制や留学生の流れ）として考えられていた従来の東アジア世界史論に対して、留学生を出す側の間（「東夷」間）での交通を（これを担った者も留学生として）問い直すことが、新たな東アジア世界史の有効性を見出すという可能性をもっているのではないか、との研究の方向性への展開、さらに昨年度の同第3回での中核（唐）・周辺（新羅）・縁辺（日本）という新たな提言とそれに対する議論となって展開されてきた。今年度はそれに沿って「モノ」からみた中国と朝鮮半島および日本列島との関係という視角を中心に据えての研究を推進することができた。

本誌に掲載されている第4回公開講座・シンポジウムの諸報告と討論、さらには第5回研究会の報告では、朝鮮半島の考古学の成果を紹介していただいた。

またこのプロジェクト発足のきっかけともなった井真成墓誌研究においても、昨年度、本プロジェクトは、井真成の「身分」について新たな見解を提起することができたが（『年報』3号掲載）、今年度の第4回研究会では、詳細な史料でもって、この見解についての議論をさらに深めることができた（本誌に掲載）。

さらに本誌には、葉國良氏による、「杜嗣先墓誌」を著録した際の経緯に関する一文を掲載することができた。この墓誌は、第2回シンポジウムで「日本」という国号の最古の資料として葉氏が紹介してくださったものである（『年報』2号掲載）。葉氏と、このことにつき紹介の労をお取りいただき、その翻訳もしていただいた高橋継男氏に感謝申し上げたい。

こうした課題を検討するに当たっても、また地域間交流の具体的な研究をするに当たっても、本プロジェクトがホームページ上に公開している「古代東アジア世界史年表」の有用性がますます大きなものになってくれることを私たちは願っている。今年度はこの「年表」の年代の枠をさ

らに広げて公開することができた。

ともあれ、本年度の第4回公開講座の講演、シンポジウムの報告を引き受けていただいた諸先生に、この場を借りて感謝申し上げたい。また当日参加していただいた皆様にも、多くの質問を寄せいただき、討論を活発なものにさせていただいたことに対して、お礼を申し上げたい。さらに第4回・第5回の研究会の報告者・参加者にも、本センターが研究者間の研究において情報交換の場としても少なからず機能したことの報告とともに感謝申し上げたい。あらためて、この『年報』に対して、またこの研究プロジェクトに対しても、忌憚のない意見・批判をお寄せいただければ幸いである。

来年度は、上述いたしましたように本研究プロジェクトの最終年度となります。このプロジェクト発足のきっかけともなった井真成墓誌研究の総括、ならびに東アジア世界の有効性についても議論をさらに深めて参りたいと存じます。公開講座・シンポジウム・研究会へのご参加をよろしくお願いいたします。

(飯尾秀幸)